

# 日置橋の桜を描いた絵

## 日置橋

堀川を紹介した数多くの絵画の中では森玉僊（高雅）の『名古屋名所団扇絵集』のうちの「堀川花盛」が最もよく知られた絵であろう。

遊覧船が何隻も堀川に浮かんでいる。なかには芸者が乗り込んでいる船もある。船の中から桜を愛でている、どの人の顔も春爛漫の景色を楽しんでいる様子が生き生きと描かれている。橋の上からも、何人もの人が川を眺めたり、岸辺の桜を愛でている。川岸に建てられた栈敷には提灯が吊るされ、花見の賑やかさがうかがえる。往来を行く人も、今を盛りと咲き誇る桜を楽しんでいる様子が表情によく表れている。武士も、町人も、老いも若きもみな満開の桜に遭遇できたことを喜んでいるようだ。筏を流している人も思わず桜の美しさに見とれているようだ。花見の季節に川で泳いでいる人も描かれている。

この団扇絵を見ても堀川の花見が、いかに当時の人々に享受されていたかがわかる。それはまた、人々の楽しみが中心が堀川であったことの証明でもある。堀川に桜を植えたのは御普請奉行の堀弥九郎だ。文化年間（1804～18）に日置橋兩岸に桃と桜を数百本植えたのが、十数年後には名古屋屈指の花見の名所となった。

団扇絵の作者、森玉僊は『尾張名所図会』に「堀川日置橋より兩岸の桜花を望む図」を描いている。兩岸の満開の桜花を、橋の上から見入っている人々を描いた図だ。彼は、絵に添えて、日置橋を次のように紹介している。

兩岸日置橋より北の方、西水主町まで数町の間、数百本の桜樹ありて、弥生の頃は貴賤袖をつらね、兩岸に往きかふ群衆、水には船を泛べて、上下に花を賞するさま、さながら嵐山、隅田川の春興にも劣らぬ勝地なり。文化年中、府の世臣堀氏、数百根の小樹を植ゑ並めしが、今は繁茂してかくのごとし。

堀川の桜を江戸の隅田川、京の嵐山に比肩するものと賞賛している。

高力猿猴庵は『尾張年中行事絵抄』に「太夫堀川並桜」を描いている。日置橋を画面の中心に置き、兩岸一面に咲いている桜を描いた図だ。

高力猿猴庵が描いたものと推定されている『御船御行列之図』がある。

これは享和2年（1802）の聖聡院（從姫）の船遊びの様子を描いたものである。日置橋から納屋橋までの御船行列をする從姫の一行と、それを見物する群衆が画面一面に描かれている。尾張九代藩主宗睦は世子に恵まれなかったため、分家の高須家より養子として治行（1760～93）を迎えた。この治行の夫人が紀州藩主宗将の娘の聖聡院（1757～1804）である。

聖聡院が夫と義父の廟所参拝と気鬱の養生のために江戸の藩邸を出立したのは享和2年8月2日のことであった。名古屋に到着した聖聡院を見ようと人々は、彼女の出かける、いたる所に押しかけた。その騒動が、最も高まったのが9月15日と10月15日の堀川での船遊びであった。

『御船御行列之図』には何隻もの警備船が描かれ、いかめしい警戒のもとに船遊びがなされたことがわかる。警備船に囲まれるようにして、ひときわ華やかな飾り付けをした彩鷓丸が描かれている。船の上では、太鼓がたたかれ、賑やかなものだ。葵の御紋もいかめしく、幕をたらしした船が朝日丸だ。

この絵の最大の魅力は御船行列を見物している群衆だ。いったい何人の見物人が、この絵に描かれているのだろう。老若男女、あらゆる階層の人々が兩岸より、御船行列を見物している。

御船行列だけでなく、聖聡院の出かける所、どこもかしこも人並みであふれた。



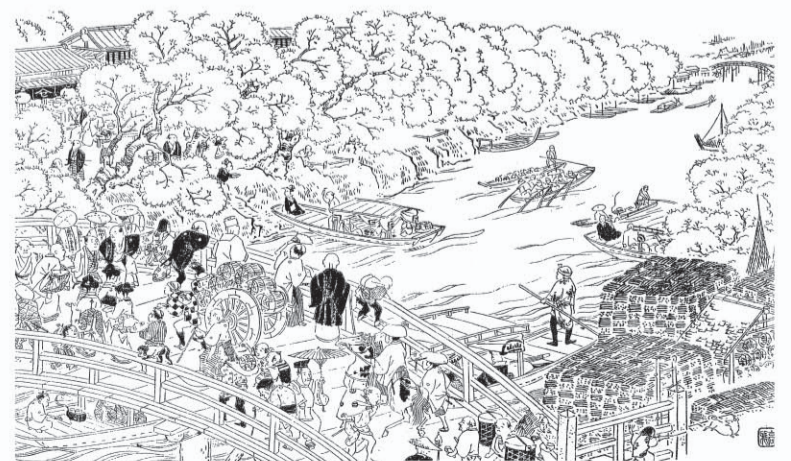
堀川花盛（名古屋名所団扇絵集：名古屋市博物館蔵）



昭和14年頃の日置橋（名古屋都市センター蔵）



御船御行列之図（名古屋市博物館蔵）



日置橋より兩岸の桜花を望む図（尾張名所図会：鶴舞中央図書館蔵）